

## 四国カルスト、大野ヶ原のこと

大西清見

<日程> (マイカーにて) 10月7日(木) 大阪南港—(フェリー)—/—8日(金) 東予港—四国カルスト—天狗高原P(幕営)/9日(土) 天狗高原—五段高原—姫鶴平—大野ヶ原—東予港—(フェリー)—/—10日(日) 大阪南港

10月7日～10日、四国カルストに行ってきました(単独行)。登山としてはもの足りませんが、日本ではあまり見られない、カルスト地形の幻想的な風景が待っていました。四国カルストは、愛媛県と高知県の県境に位置する、標高1,000m～1,450mの石灰岩の高原地帯です。日本の三大カルストの一つで(他に山口県・秋吉台、福岡県・平尾台がある)、東側より天狗高原・五段高原・姫鶴平(めづるたいら)・大野ヶ原からなります。一帯は愛媛県・高知県から県立自然高原に指定され、溶食作用で誕生したドリーネ(小凹地)やカレンフェルト(石灰岩の岩柱が林立している地形)などのカルスト地形が広がっています。四国カルストではカルスト地形に牛の放牧や風力発電のある五段高原～姫鶴平のロケーションに人気があるのですが、私は個人的に四国カルスト西端の大野ヶ原に魅力を感じました。ここではその大野ヶ原のことを少し書いてみたいと思います。

大野ヶ原へは姫鶴平から車で約20分、その県道の道中で熱心に写真を撮っておられる中年の女性に出会いました。私も車を停めて山の斜面を見上げると、そこには初めて出会う高山植物の群生があり、女性から絶滅危惧種のヒナノキンチャクですよ、と教えてくれました。ヒナノキンチャクは何とも素晴らしい色彩とかわいい形で、誰でも一目ぼれになるほどの小さな花でした。分れ際に女性は、「誰にもヒナノキンチャクがここにあることは言わないでね、盗掘する人が多いのだから」と笑顔でおっしゃい、思わぬ大野ヶ原への山旅が始まったのでした。

大野ヶ原へ訪れる人は比較的少なく、標高1,100mを越える高原と酪農を主体とした農業集落のヨーロッパ的な風景に一気に引き付けられます。年平均気温も10℃前後とか、アンデス山地の高山気候と同じ気温で年間を通して過ごしやすいように思われます。大野ヶ原には全体がカルスト地形、広大な面積に起伏の緩やかな大草原が広がっていました。最高点は標高1,403mの源氏ヶ駄場、小松地区の駐車場から直登して約30分で頂上に立ちます。源氏ヶ駄場という地名が気になり調べると、「源平の戦いに敗れた平家の残党が、白い石灰岩の白馬と見誤り、退去した」という伝説に由来ということがわかりました。その石灰岩の乱立から伝説の由来を考えるのも納得ができて楽しいものです。頂上からは四国山地も一望でき、また眼下の大野ヶ原一帯にはカレンフェルトやすり鉢状ドリーネなどが見られ、なだらかな斜面は牧草地や畑、宅地として利用されて分かります。ヨーロッパの農村に似たいつまでも眺めていたい牧歌的な風景でした。

ところで別紙の地図(西日本の石灰岩分布)を見て、四国カルストと他のカルストの分布にずいぶん違いがあることに気が付いたのです。石灰岩の分布域は中央構造線の南側に沿うように2列存在しており、そのなかに四国カルストがあります。中央構造線と1,000mの高原に位置する四国の石灰岩地域の関係などを調べてみたくなり、新しい四国カルストの世界に入ってしまった。こちらからも四国カルストへの地学の旅も続きそうです。



偶然、大野ヶ原への林道で絶滅危惧種の  
ヒナノキンチャクに出会いました



早朝の五段高原、風力発電・牧場に  
雲海の美しい風景です